

敷地



東洋大学川越キャンパス

木の居場所づくり

—資源の見直し・活用で繋がるモクとヒト—

仲間たち

- B4
 - ・小寺彩乃
 - ・堀江夏樹
 - ・和田拓真
 - ・漆原壮一
 - ・西條陸希
 - ・黒瀬俊介
- B3
 - ・幾井悠多
 - ・保坂美菜
 - ・長岡涼
 - ・岩野沙也加
 - ・下田楓夏
 - ・富井大翔
 - ・滝浦啓叶
 - ・山形尚生
 - ・安藤実生
- B2
 - ・植上稜太
 - ・平塚涼佑

ご協力いただいた方々

- ・綾部工務店 様
- ・馬場崇 様
- ・神流川森林組合 様
- ・上野村森林組合 様
- ・こもれびの森里山支援隊 様
- ・東洋大学工藤和美研究室
- ・東洋大学高岩裕也研究室
- ・東洋大学岡本和彦研究室

キャンパスの森の木と森林組合が持つ森の木の中に「消費」を必要とする未利用材がありました。それらの木々は、質の良く使える材も多くありましたが、現状使い道が確立されていません。お互いの未利用材を「活用」し、その活用が今後も続いていくような、循環を意識した木造のパビリオン制作を行いました。このパビリオンが未利用材の居場所になるとともに、人の居場所として次の活動に繋がります。

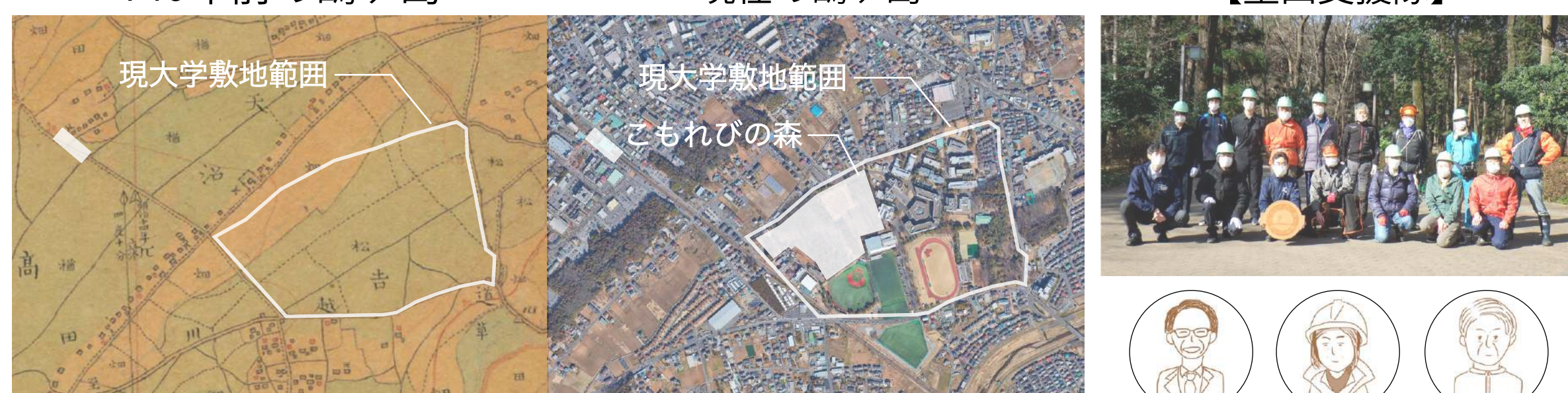
1 きっかけ：活用の可能性をもつ木々

私たちの大学は、新田集落の跡地にあり、大学内には住民のものであった雑木林が残されています。現在大学内の木々は、里山支援隊によって維持・管理活動がおこなわれています。

140年前の鶴ヶ島

現在の鶴ヶ島

【里山支援隊】



出典：農研機構(1881年)

出典：GoogleEarth(2020年4月25日空中写真)

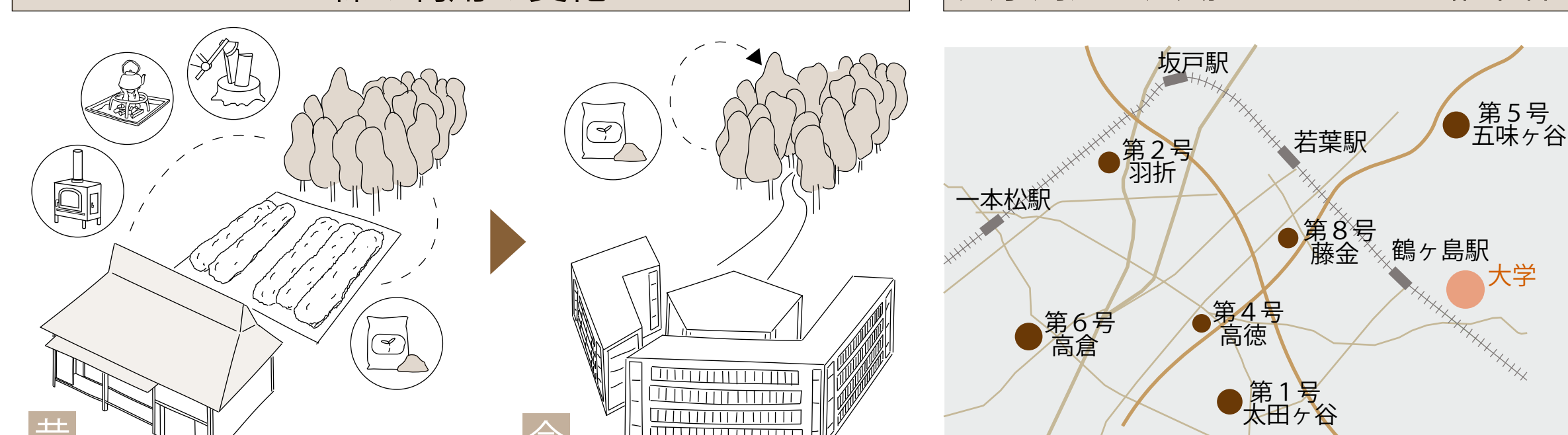


小瀬教授 藤野さん 塚本さん

雑木林の用途変化と活用しきれない現状

森の利用の変化

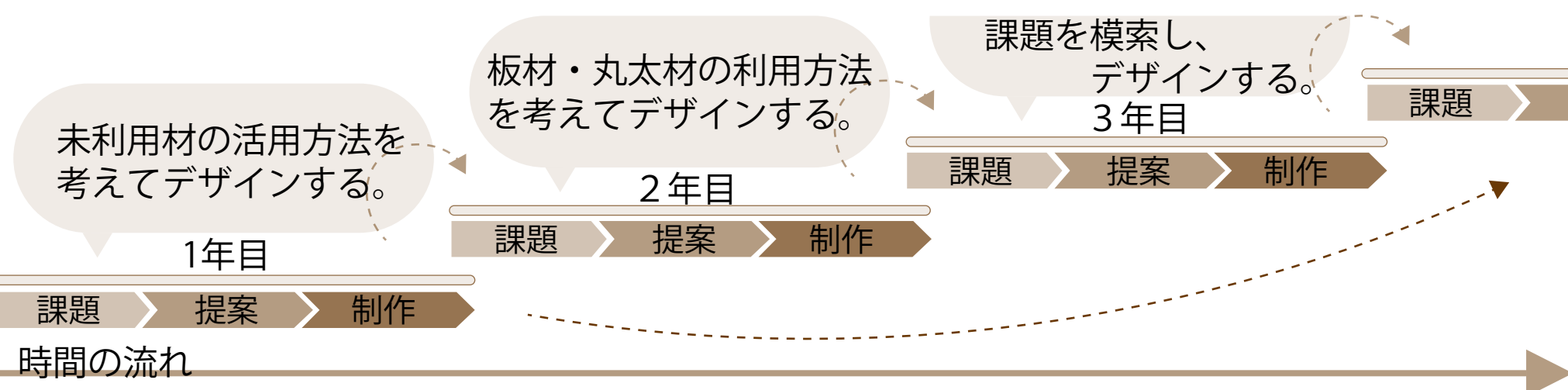
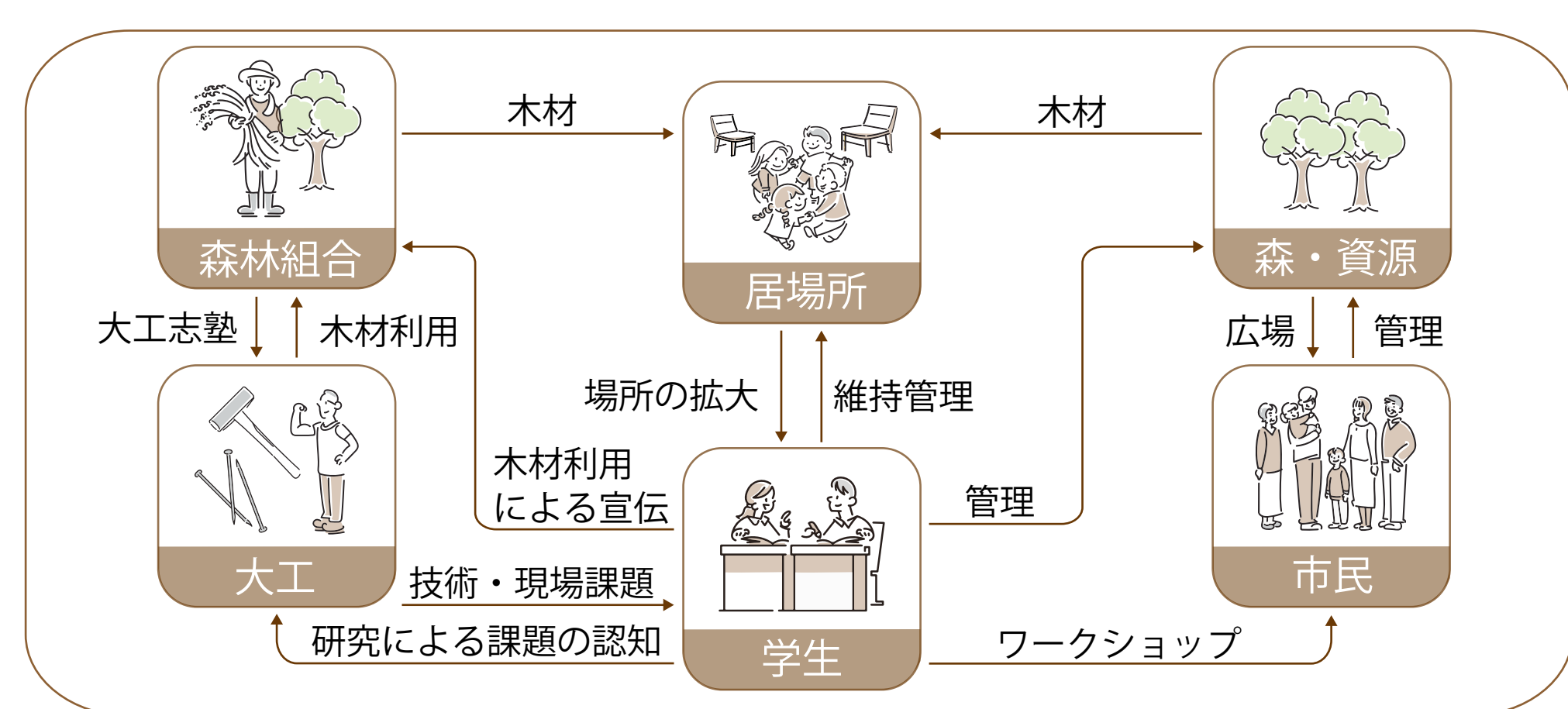
大学周辺の広場になっている雑木林



これらの雑木林は住民が生活のために所有していたこともあり、時代を超えて用途が異なり、資源の活用が十分にされていない状況にあります。また、周辺地域にはこのような場所が多く残っており、木材の活用方法は確立されておらず、広場の空間として使われています。

3 提案：モクとヒトの居場所をつくる

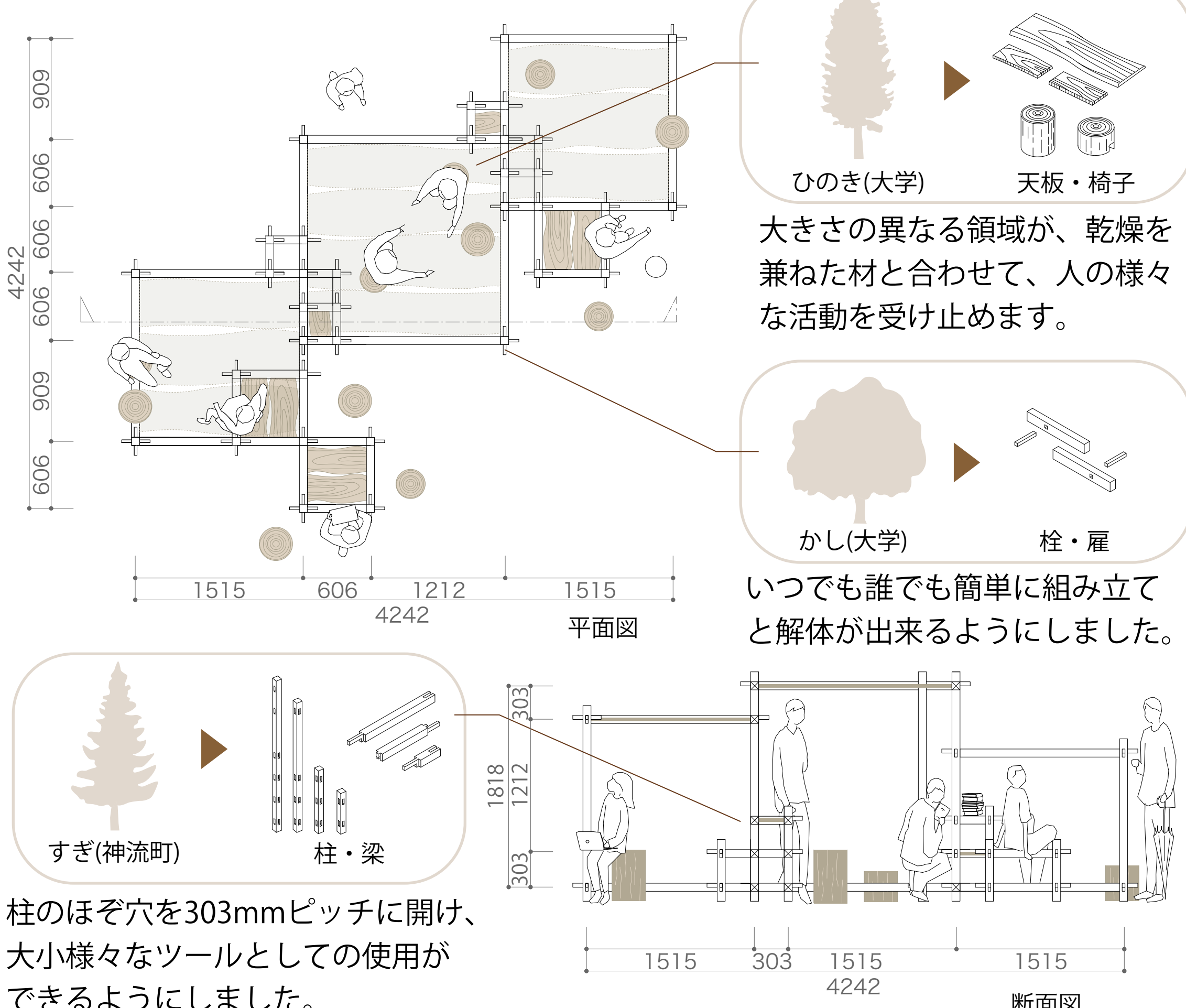
関わりと広がり



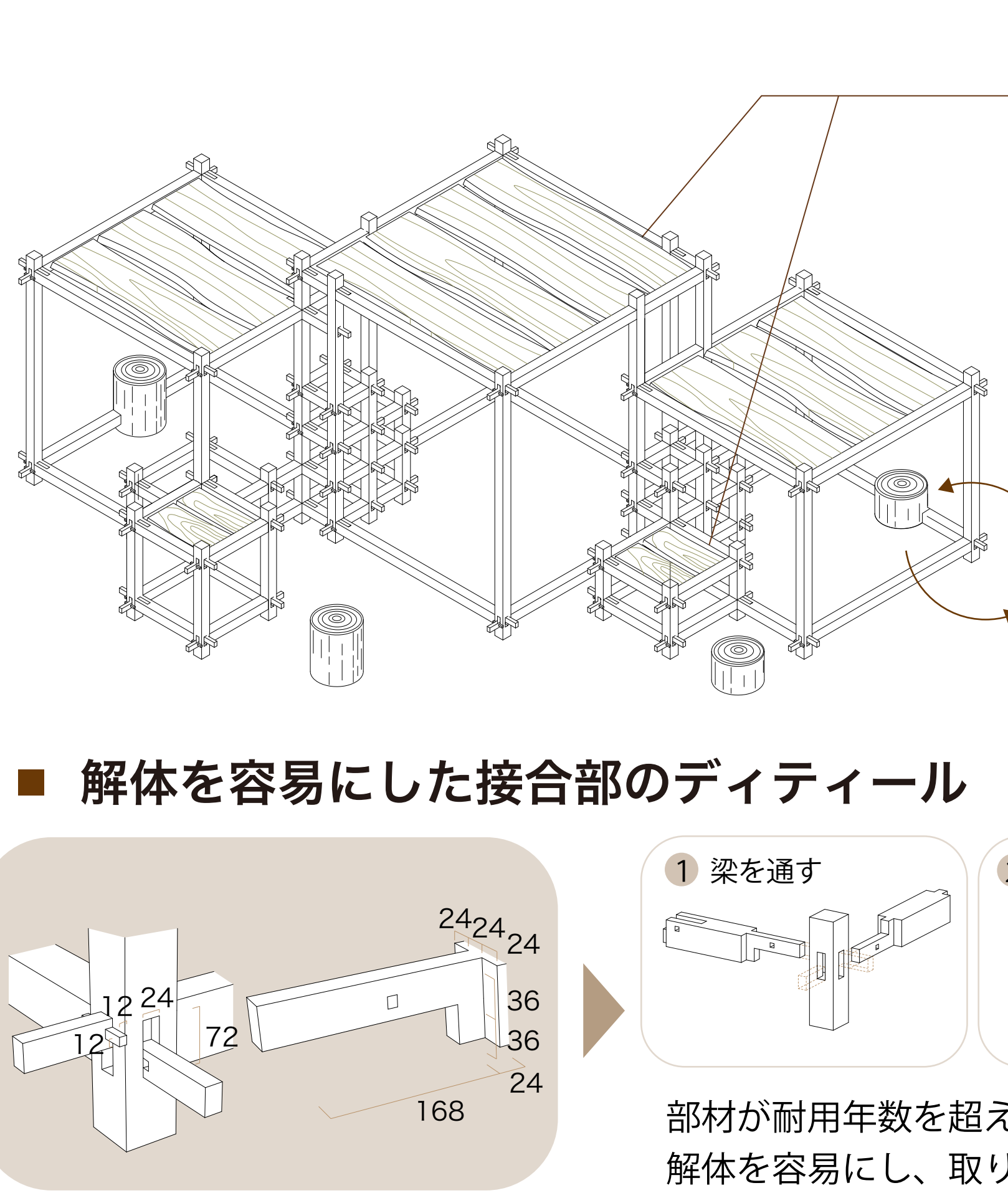
長期的に課題に取り組むことで地域社会との関係性を構築しながら、課題解決の方法を模索し、活用方法を確立していくことを試みます。

4 意匠

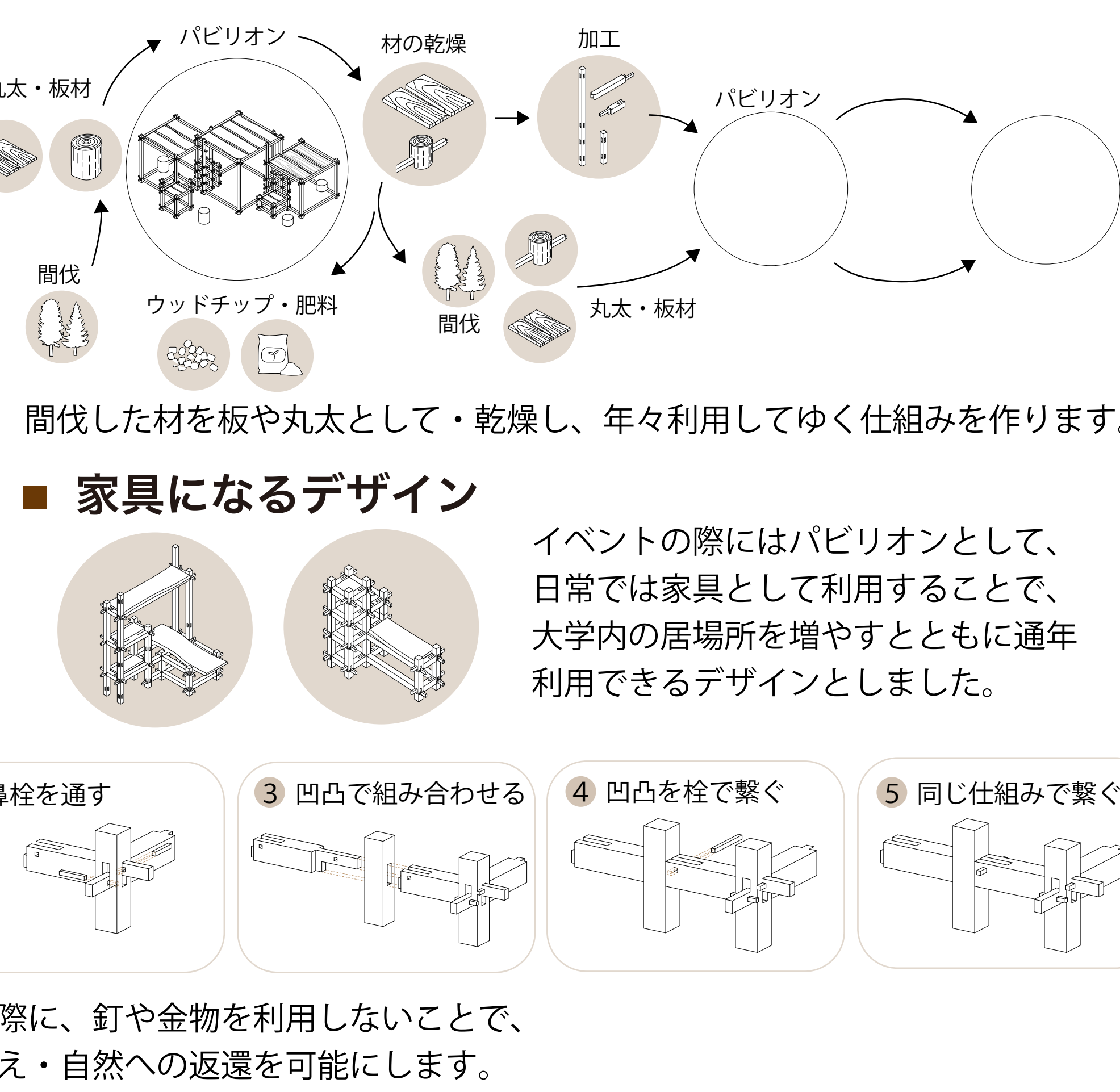
ヒトのモジュールに合わせたスパン



資源の循環を意識したデザイン



乾燥して次の材料の生成を行う



2 再考：本当に活用できない木材なのか？

活用方法が定まっていない木材は一般に流通を行う森林にもありました。これらの材は決して使えない材ではありません。これらの利用価値を高め活用方法を見つけるため、今回群馬県神流町にご協力をいただきました。「かならず」を一緒に利用して木の居場所づくりを行います。

大学の捨てられてしまう木材



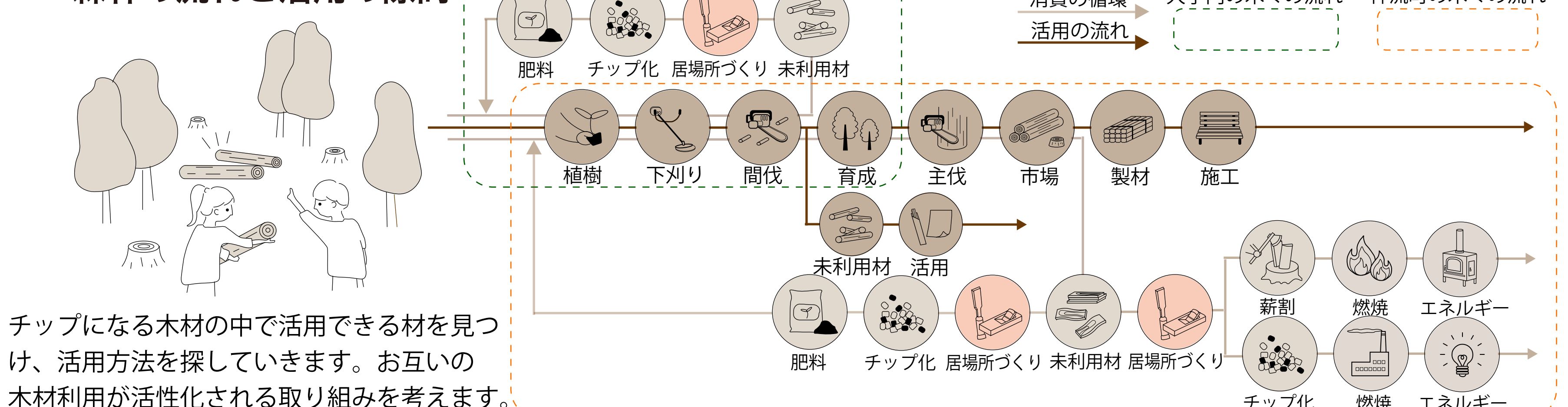
大学内の樹木は年を取り、台風での倒木やなら枯れなどの問題があります。また、伐倒した木のほとんどはチップ化または処分されます。

神流町のチップ化されてしまう木材



大学外の一般的な流通材でも規格化されていない木材や端材は、無節の良い材でも利用率が少なく、資源の活用が十分でない状態です。

森林の流れと活用の隙間



チップになる木材の中で活用できる材を見つけ、活用方法を探していきます。お互いの木材利用が活性化される取り組みを考えます。

今回の活動と寄り道



今回の活動では、多くの方との出会い・関わりが地域を考えるきっかけとなりました。身近な場所をきっかけに、他の地域と繋がることは現代の環境を生かした問題の解決方法になると考えます。